

萬年 甫著

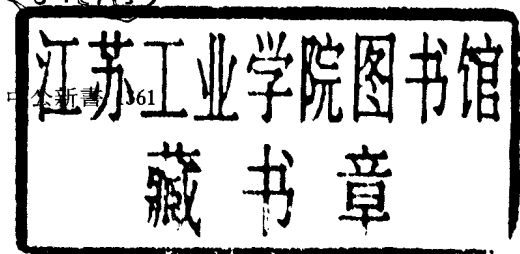
動物の脳採集記

キリンの首をかつぐ話



中公新書

1361



萬年 甫著

動物の脳採集記

キリンの首をかつぐ話

中央公論社刊

萬年甫 (まんねん・はじめ)

1923年(大正12年)千葉県津田沼に生まれる。

1947年, 東京大学医学部卒。48年, 東京大学医学部付属脳研究施設で研究を始める。

54年, 東京大学大学院特別研究生の前期および後期の課程を修了, 東京大学助手。55

年—57年, フランス政府給費留学生として

滞仏。57年, 東京大学講師。59年, 同助教授。

60年, 東京医科歯科大学医学部助教授。

63年, 同教授。89年, 同定年退官し, 名誉

教授。脳解剖学専攻。

著書『神経学の源流 I. パパンスキーとともに』『神経学の源流 II. カハールとともに』『神経学の源流 III. ブロカとともに』(東京大学出版会)

『A dendro-cyto-myeloarchitectonic atlas of the cat's brain』(岩波書店)

『脳の探求者ラモニ・カハール』(中公新書)

『脳解剖学』(南江堂) その他。

訳書『レオナルド・ダ・ヴィンチ解剖手稿』(岩波書店, 共訳)

『科学者バストゥール』(みすず書房, 萬年徹共訳)

どうぶつ のうさいしゅうき
動物の脳採集記

中公新書 1361

©1997年

検印廃止

1997年 5月15日印刷

1997年 5月25日発行

著 者 萬 年 甫

発行者 笠 松 巖

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-4-34

◇定価はカバーに表示してあります。

◇落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

Printed in Japan ISBN4-12-101361-1 C1245

目次

第一話 動物の脳の標本に出会うまで	2
-------------------	---

少年倶楽部の世代／大島正満先生の講義／脳の標本との出会い／脳研通い

第二話 脳の比較解剖学	17
-------------	----

戦後のインターン制度／「脳」と「脳」はどう違う／大人の頭蓋と赤ん坊の頭蓋／人脳三昧の日／連続切片とは／人間と動物の脳の比較——比較解剖学という学問／戦前のオットセイ脳の採集

第三話 アシカの脳	46
-----------	----

チャンス到来、野毛山動物園へ／ぶっつけ本番

第四話 キリンの脳 63

ラジオのニュース／脳と脊髓の取り出し／キリンの首をかつぐ

第五話 子カバの脳 76

上野動物園の復興／昭和の方舟——林寿郎さんの
労苦／子カバの死因解明／死体と格闘／ラジオ放
送の体験

第六話 ゾウの脳 94

I 凍死したゾウ

新聞に出たゾウの死／ハンニバルのゾウ／やじ馬
にまじって解剖見物／二日がかりの脳出し

II 温泉街のゾウ

旅館で飼われたゾウ／修羅場さながらの解体現場／ぎゅう詰め運搬車／映画「象を喰った連中」

第七話 スピッツ「シロ」の脳……………133

うまく歩けない子ネコ／小脳の障害／シロの吼え声

第八話 アカウミガメの卵……………142

三木成夫君のこと／徳島の日和佐へ／爺さまの話／子ガメは海の方をどうやって知る／産卵に立ち会う／孵卵器での孵化

第九話 イルカの脳……………166

「トゥルシオップス」／小川先生の鯨談義／イルカの頭部のメロン／脳のミゾとシワ／ガルの骨相学／ブロカと失語症／シワの数と知能／イルカの嗅覚をめぐって

第二〇話 脳から見た世界……………204

魚の脳／鳥の脳／動物の脳を並べてみると

あとがき……………217

動物の脳採集記

——キリンの首をかつぐ話

第一話 動物の脳の標本に出会うまで

少年倶楽部の世代

私は子供の頃から動物が好きであった。

関東大震災の年に生れて、世にいう「少年倶楽部世代」である。小学校時代の読み物は当然『少年倶楽部』と決まっていた。むしろ、それしかなかったと言ったほうがよいかもしれない。毎月発売日が待ち遠しく、学校から家に帰ってランドセルをおくのもどこかしく、近所の商店街の本屋に駆けつけて馴染みのおばさんから雑誌を受け取ると、直ぐその場で頁を繰り、読みながら家に帰るのが何よりの楽しみであった。最初に見るのはなんととっても田河水泡の「のらくろ」で、次は南洋一郎の「吼える密林」とか「海洋冒険物語」などの動物ものだった。人気の高かった山中峯太郎の「亜細亜の曙」や平田晋策の「日米若し戦わば」や「昭和遊撃隊」などもちろん愛読したが、私の場合は動物もののほうが先だった。

「のらくろ」には文字通り熱中し、今の子供たちの「ドラえもん」や「鉄腕アトム」や「ゴジラ」によせる興味に優るとも劣ることはなかった。なにしろ、現代とは比べものにならないくらい娯楽の種類は少なかったし、何遍でも繰り返して読み、絵を模写したり、せりふも一生懸命覚えたものだ。昇進して将校になった「のらくろ」が、やがて戦争に加わり、敵陣目掛けて塹壕の中から突撃に移るときの長せりふ「たまたまにあたまたまにあたる、たまにたまげる、こりゃたまらない」がおかしくて暗記し、今でも直ぐ口をついて出てくる。

「吼える密林」の著者、南洋一郎は読者の少年たちにこう呼びかけている。

「……昔から大国民は冒険を好む。勇ましく激しい冒険精神に充ち満ちた国民は興隆し、そうでない国民は亡びる。私は諸君が勇敢な日本男子であることを知っている。その諸君の心に溢れる冒険精神をいよいよ盛んに燃え上がらせるためにこの書を諸君に贈る。本書は、アフリカ、マレー半島、ボルネオ島等の密林で、猛獣と闘ってこれを征服した大冒険談である。本書を読んで、諸君の熱血に燃える心は猛然と奮い立つだろう。その勇猛心。それが尊いのだ。それが日本男子の心なのだ……」

今だったら「猛獣と闘ってこれを征服し……」などと言うと、ワシントン条約に抵触したり、動物愛護協会あたりからきついお叱りを受けること必定であるが、私どもの小学校の頃はこれらの言葉に否応なしに奮い立ち、海のかなたのアフリカ、マレー半島、ボルネオ島などに夢を馳せ、

なんとしても将来は冒険家になりたいと舞い上がっていたものだ。現代の少年たちの宇宙飛行士への憧れにでも匹敵しようか。

その中に書かれた数々のエピソードのうちで、巨象と大犀の戦い、象の墓場の話などにスリルを感じ好奇心をわかす一方で、ボルネオだったかスマトラだったか忘れたが、オランウータンを捕獲するのに、最初弱い酒を壺に入れてジャングルに置き、もしそれを見つけて飲んだら、段々に酒の濃度を増し、最後にうんと強いのを与えて泥酔したところを捕えるという話など、実にユーモラスで、それをきわめて写實的に表した樺島勝一のペン画とともに今でもありありと脳裡に浮かんでくる。

小学校高学年になってからは、講談社発行の大島正満氏著『動物物語』と『動物奇談』を熱心に読んだ。これらは動物学者の書いたものだけに、血をわかすというよりも学問的で説得力に富み、文字通り巻を措くあたわずで、表紙が擦り切れるまで読んだ。大学に入っても大事に持っていたが、戦中の疎開騒ぎで紛失してしまい、本書の原稿を書きながらちょっと参考にしたいこともあったので、発行元の講談社にはあるだろうと書庫に入れていただいたが見つからず、最後は国会図書館で『動物物語』だけが見つかったほっとした。

動物好きを助長したのは読書だけではなかった。開業医だった父が、新宿の武蔵野館で猛獣映画が上映されると必ず連れて行ってくれたことであった。最初は父の気散じのお供で行って

たのが、そのうち新聞に広告が出るとこちらから催促して連れて行ってもらった。猛獣映画といっても「ターザン」とか「キングコング」とかの筋のある劇映画ではなく、マーチン・ジョンソン夫妻とか、フランク・バックとかのいわゆる猛獣探検家がアフリカや東南アジアを旅して、ある時は野生動物の群れを飛行機から観察したり、ある時は罠をかけていろいろな動物を捕獲したりするたぐいのものであった。

当時はまだ活弁の時代で、切符を買って席に落ち着き、買って貰ったキャメルなどをしゃぶっているうちに場内が暗くなり、しんと静かになると、やがて舞台の幕の端から弁士が音もなく現れて弁士席におさまる。すると、それを合図に幕がするすると開いて、映写が始まる。

この手の映画の弁士は武蔵野館では必ず徳川夢声氏で、子供心にもまことに名調子で、聞いているとひとりでに吸いこまれるようで、身じろぎもせず聞きほれたものであった。画面で展開される情景とそれにびたりと呼応する弁舌に、毎回胸震いするような興奮を覚えたものである。今にして思えば、落語が好きだった父は、猛獣はとにかく、この徳川夢声氏の名演をこよなく楽しんでいただのだと思ひあたる。

現代のように窓も開けられないジェット機時代から見れば、頭の上に覆いすらないまことに開放的なプロペラ機の座席から四方八方に身を乗り出し、爆音に驚いてアフリカの原野を疾駆するキリンの群れや、タンガニカ湖から水煙を上げて飛び立つフラミンゴの大群を撮影するマーチ

ン・ジョンソン夫妻の姿は、今風にいえばまことに格好よく、優雅の極みであった。また、マレーの密林に仕掛けた罠を見回りに行つて、虎に襲われて武器も用いずに敢然とこれと格闘するフランク・バックの勇姿は、その瞬間大きな身振りとともに大音声に「あーら、危ういかな、フランク・バック氏！」と叫ぶ夢声氏の声音とともに、今でも眼底にありありと浮かんてくる。

動物にまつわる小学校時代のもう一つの忘れがたい思い出は、来日したハーゲンベック・サーカスを見たことである。芝浦の入り口に大きなテントが張られ、夜の部でその中に灯がともると、そのテント全体がおとぎの城のように浮かび上がり、うっとり眺めたものであった。それまでは動物園の檻の中を動き回ったり寝そべったりしている姿しか知らなかった猛獣たちが、猛獣使の鞭さばきによっていろいろな難しい芸をこなすのを見て、無性に興奮したものであった。

はつきり記憶に残っているのは、アシカのラッパ演奏だった。とはいってもアシカが直接にラッパを吹くわけではない。長い台の上に、吹き口にゴムの玉をつけたラッパを音階順に並べ、アシカがこれらを鼻先で押すと音がでる仕組みであった。演じられた曲は、小唄勝太郎という芸者が歌って当時大流行の「島の娘」で、「はあ、島で育てば娘十六恋心、人目忍んで主と一夜の仇なさけ」などの歌詞の意味はさっぱり分からなかったものの、哀調をおびたメロディは街のそこら中で耳にするので、小学生でもいつのまにか覚えていたのである。そのアシカの演奏は稚拙であるために、一層哀調がこもり、満場大喝采で、いつまでも深く耳に残った。

サーカス好きが高じて、後年フランスに留学した折りにはパリにあった二カ所の常設のサーカスには勉強の合間をぬってはせっせと通い、旅行の途中でもサーカスといえばつとめて出入りすることにしていた。ハンプルクでは本拠のハーゲンベック動物園を訪れ、再びアシカの芸を見る機会を得た。観客席に座って、アシカのきびきびした動きに歓声をあげ手を叩いて喜ぶ周囲の子供たちにかつての自分の姿を重ね、耳の底では「島の娘」のメロディが流れていた。

大島正満先生の講義

そんな私はやがて旧制七年制高校の一つであった府立高校の尋常科（現在の中学）高校一年生に相当）に入学し、その学校の高等科の動物学の教授が大島正満先生であることを知り、やがてその講義を聞く期待に胸が弾んだ。期待通りその講義は分かりやすく、また大島先生の話の間の取り方が絶妙で、毎週のその時間が楽しみだった。大島先生の講義で一番印象に残ったのは、ウォレス線の話であった。先生はワラス線と発音しておられた。

ウォレスは英国の博物学者で、一八五四年三一歳のときから八年間マレー諸島を旅して、そこに生育する動植物の比較研究を行い、その結果、これらの島々は動物相に関して二分されることを発見した。すなわち、バリ島とロンボック島の間の狭い海峡を境として、その東側はオーストラリアの動物相に、西側はアジアの動物相に類似するというのである。これは動物地理学におけ

る画期的な発見であった。この境界線はさらにボルネオ、スラウェシ（セレベス）島間のマカッサル海峡を通り、フィリピンのミンダナオ島の東側に至り、その全体を今日ウォレス線と呼んでいる。

このウォレスはその後の一八五八年に、マルサスの『人口論』からヒントを得て、適者保存に基づく自然選択の働きによって種の形成を説明することに成功し、論文をダーウィンに郵送した。これは種の起源に関するダーウィンの未発表の構想と内容が一致していたため、ダーウィンはウォレスの論文の要旨と一緒に一八五八年七月のリンネ学会で発表した。こうした経過があったにもかかわらず、今日『進化論』の提唱はダーウィン一人の功に帰されているという趣旨のことを大島先生は淡々と話してくださいました。しかし、その頃の筆者たちの正義派めいた気持からすると、ダーウィンのやり口になんとなく功を独占しようとする作意が感じられ、講義のあとで二、三の友人とウォレスの肩をもち、ウォレスのほうがダーウィンより偉大だと熱っぽい議論を交わしたことを覚えている。

期待に満ちた大島先生の講義も戦争の勃発で駆け足のように慌ただしく終り、われわれの世代の若者は否応なしに大学受験に追い込まれた。

昭和一七年秋、東大医学部に入学した私は、医学生にとって最大の関門である半年近くにわたる解剖実習が終って間もなく、その頃の国民病であった結核性肋膜炎を患って約一年間病床に臥

す身となった。止むなく休学し、明けて昭和一九年春、一年ちがいのクラスに編入された。

早速、病理学の講義に出席してみたところ、さっぱり分からず、やれやれと教室を出たところへ、府立高校の三年先輩の渡辺宏さんとぼったり出くわした。渡辺さんは尋常科の頃から秀才の誉れ高く、われわれ下級生からは畏敬的であった。医学部を卒業すると直ぐに大学院特別研究生に選ばれて、医学部付属脳研究施設（略称脳研）で脳解剖学で有名な小川鼎三教授のもとで研究を補佐していた。この大学院特別研究生というのは戦時中の研究者不足を補うために設けられた制度で、これに選ばれるだけでも実力の程が知れていた。ただでさえ近寄り難い存在で、しかもいきなり顔を突き合わせたので、身を避けるようにして挨拶すると、「やあ萬年君、元気かね。君、病理学の講義聞いてて分かるかい。分からないだろうな。分からないければ出席しなくていいんだよ。それより僕のいる脳研にきて脳の連続標本でも観察し給え。講義は直ぐ忘れてしまうが、これは一生忘れないよ。一緒に来ませんか」そう言い終えると、すたすたと脳研の方へ歩き出した。いやも応もない。必ずついてくると自信に満ちた態度で一度も振り返らない。

私は面食らった。常日頃、父から将来は臨床医学に進むように強く言われていて、基礎医学のしかも基礎の中でもそのまた基礎の脳解剖学の教室に出入りするのは、かげに隠れて悪さをするような気がしてなんとなく気が進まない。近づかないほうが安全だと思いつつも、渡辺さんの勢いに吞まれてとぼとぼとついて行く羽目になってしまった。渡辺さんの背中に目があって私が逃

げないように監視しているような気さえした。

脳の標本との出会い

それまで実は脳研がどこにあるかさえ知らなかった。精神科の大きな建物の陰に隠れるように建てられていた脳研の建物は、予想よりもはるかに小さく見えた。階段を昇って二階の突き当りの細長い二〇畳ほどの部屋に入って、やっと振り返った渡辺さんは、部屋の一方の壁際に天井に届くばかりにずらりと並んだ蚕棚のような標本棚から、両手を大きく広げて一枚の平たい引き出しをゆっくりと引っ張り出して、部屋の中央を占める大きな机の上に置いた。その引き出しの中には普通の名刺の倍ほどもある細長いガラス板がトランプの「七並べ」のように縦横に整然と並べられていて、各ガラス板には赤と濃紫の二色の色素で美しく染められたほとんど同じ形をした脳の切片が載せられていた。これが私が生れて初めて目にした人間の脳の連続標本であった。

連続標本というのは、あとでも説明するが、脳を一枚一枚薄い切片に切って染色したのち、順序をくずさずにガラス板に貼り付けたものだ（二九ページ、図3参照）。あまりの見事さに思わずその引き出しの上に身をかがめる。誰もいないがらんとした部屋に渡辺さんの説明する声のみが響く。

「これは人間の延髄の一部に過ぎない。この人の脳の他の部分はこの引き出しからこの引き出し